市長からのメッセージ

おあい

大和郡山市長

上田　清

時代小説『阿蘭陀西鶴』（朝井まかて）は江戸前期の浮世草子作家で俳人の井原西鶴と全盲の娘おあいの物語で「母、みずゑから手を取るようにして、幼い頃から台所を仕込まれた」おあいは、障害のある自分が「台所をすることが世間では稀で、他人は稀を奇妙がるものだと思い知らされたのは、母が亡くなった日のこと」でおあいはわずか九つでした。

すでに死を覚悟した母みずゑからお通夜の料理について事細かく教えられていたおあいは、すぐ台所に立ちますが「近所の女房連中が遠慮のない口をききながら台所に入ってきて」おあいから包丁を取り上げたのです。「まあまあ、可哀想に、こないなことさせられて」「不憫やなあ」…。

目が見えないのに、料理ができるわけがない。

しかし「音と匂いと手触り」の世界でおあいはみごとに料理をこなしていたのです。

この話は障害のある人とない人との間にある壁のようなものをみごとに描いているのではないでしょうか。

その後おあいはどちらかといえば自己中心型の父西鶴を支え続けますが、ハンディを持つ人たちに対する思い込みや偏見、差別という壁をこえてお互いが理解しあうこと、あるいは理解しあえる社会を作ることがとても大切なのではないかと、あらためて感じた次第です。

ダイバーシティーという言葉があります。

通常は「多様性」と訳されていますがまさしく多様な人々で構成されているのが私たちの社会。

金子みすゞは「みんなちがって、みんないい」と表現しました。

みなさまのご活躍を心から期待しています。

新成人からのメッセージ

新たな決意

亀井　奈津子　郡山中学出身

私たちは今年、人生の節目に立ち、今までの立場から一転、「大人」という括りに含まれます。これから私たちは自身の使命を全うし、一社会人として社会に貢献できる存在にならなくてはなりません。二十歳を迎えた私は、新しい視野で、心新たに出発していく覚悟です。

成人の日を迎えるにあたり、今までを振り返ると、周りの人たちの助けや教え、愛などの影響を受けてきました。特に、今までの学生生活や習い事、全てにおいてやりたいことを存分に経験させてくれた家族には感謝しかありません。時に厳しく、正しい道へと導き、私の挑戦したいという気持ちを否定せず、どんな時でも味方でいてくれました。まだまだ家族の助けに支えられながら、学業に励む日々ですが、大人になった今、社会人として働く未来に向けて、より一層気持ちを引き締めていかなければなりません。

私は現在、看護学部に所属し、看護師になるため、日々勉学に励んでいます。周りの仲間と共に学び、実習する上で刺激を受け、たくさんのことを乗り越えてきました。残された学生生活では、今までよりも多くの試練が待ち受けていると思いますが、将来の明確な夢に向かい、日々精進していく覚悟です。二十歳という節目を迎え、今後は他者に影響を与える存在となります。残りの大学生活で看護についてよく学び、愛を持ち、周りに良い影響を与えられる存在になりたいと私は思います。

「大人」という道

中村　海斗　郡山西中学校出身

新成人からのメッセージ

「新成人」。この言葉を見て、聞いて、皆さんは何を思うでしょうか。私は真っ先に、「責任」という言葉を連想しました。これまでの人生、私は家族、先生方をはじめとして周囲の方々に沢山のご迷惑をかけてきました。そんなとき彼らは、「子どもだから」「まだ社会をよく分かっていないから」と、寛容な心で許してくださいました。しかし、成人となった私たちには、大人としての大いなる責任というものがこの先ついて回ることとなります。自分のした間違いは自分で責任を取らなければなりません。「子どもだから」で許されるのはもう終わり。今度は私自身が大人になって、ゆくゆくは次世代の子ども達を温かく見守ってあげられるような大人になりたいと思います。

「新成人」。この言葉にはなにも責任ばかりが重くのしかかるだけではありません。私たちはまだ大人になったばかりです。これからの人生をどのように生きていくかは自らの自由ですし、どう人生を作り上げていくかは自分次第です。しかし、自由という言葉にもまた、責任がついて回ります。自らの道を突っ走るばかりに、他者の歩む道を踏みつけてはならないのです。周囲への配慮を忘れず、時には共に手を取り合って歩みを進めて行く。そういったことが大事なのではないかと思います。

私は今、具体的な将来像が掴めず、漠然とした不安を抱えています。皆さんの中にもそのような方は少なからずいらっしゃると思います。しかし、私たちの歩む道はまだ始まったばかり。将来どうなるか、どうするかなんて、自分次第でどうにでもなるのです。少しの危機感と、多くの希望をもって、これからも精一杯精進していきたいと思います。

〈令和2年 新成人の集い「成人式」新成人スタッフ〉

新成人の皆様へ

第7回水木十五堂賞受賞者
映像作家

保山　耕一

メッセージ

「こころざしをはたして　いつの日にか帰らん
　山はあおき故郷　水は清き故郷 」

唱歌「故郷」（作詞:高野辰之）の歌詞である。若者には大きな夢を持って広い世界に羽ばたいて頂きたい。そして、志を果たして、夢を叶えて、いつの日にか故郷に戻り、人生で得た数々の経験を故郷である大和郡山のために生かして頂きたい。故郷を愛する心が、ご縁をつなぎ、人の輪を広げ、人生を豊かにする。故郷を想う気持ちを心の真ん中に持ち、これからの人生を歩んで頂きたい。これから始まる長く果てしない人生の旅の中で、故郷はいつでもあなたをあたたかく迎え入れてくれるのだから。

保山耕一氏は、大和の映像作家として「奈良には365の季節がある」をテーマに現地に赴き、全身全霊をかけて撮影され、大和の風景と時の移ろいを秀逸な映像叙事詩として蒐集し、その映像を様々な手法で広く紹介されています。また、テレビ番組「情熱大陸」「世界遺産」「真珠の小箱」などの映像も制作され、それらの作品は映像作家として高い評価を受けておられます。

（注）唱歌「故郷」の歌詞の使用については、高野辰之記念館（長野県中野市）の承認をいただいております。